

# 前置詞の英文法研究

——格と機能の諸問題——

大 森 裕 實

## A Study on the Preposition in English Grammar: Issues of its Case and Function

Yujitsu OHMORI

The aim of the present paper is to explain the complicated matter of English prepositions from the viewpoint of diachronic and functional syntax, so as to describe the characteristics of the prepositional phrase following a verb in contemporary English grammar.

In this paper a tentative approach is taken toward understanding a prepositional phrase as having not a static function but rather a dynamic one when it functions as an object of a verb, in such a typical sentence as '*the existence of UG constraints on L2 acquisition is confirmed*', which can be paraphrased as '*the existence of UG that constrains L2 acquisition is confirmed*'. In particular, this understanding is supported by a consideration of the relationships between Dative of Interest and Of-phrases, the transition from the verb's genitive concord to its accusative concord, which shows the preference of particles suggested by Sapir's Drift Theory, and the movement of 'bleaching' of a preposition from a content word to a concordant function word which has no hue of the content. The last point might be more important, in that much emphasis is laid on the association of the preposition's function of assigning no thematic role to the following noun phrase, with the diminishment of genitive inflections.

The present writer insists that a thorough comprehension of the grammar of prepositions should lead to enhancement of foreign learners' competence in commanding English.

## 序

現代英語の大きな特徴の一つに、名詞や形容詞の屈折語尾が水平化して、単語間の性・数・格の一致 (concord) を必要としない、語順によって意味関係を表わす分析的言語 (analytic language) に推移したことがあげられる。比較言語学の教えるところに依拠すれば、印欧祖語に8つあったという格 (case) の形式は、総合的言語 (synthetic language) の典型であるラテン語では主格 (nominative)・呼格 (vocative)・対格 (accusative)・属格 (genitive)・与格 (dative)・奪格 (ablative) の6格となった——例えば、*vita* “life” (第1変化) は *vīta/ vīta / vītam/ vītae/ vītae/ vītā; vītae/ vītae/ vītās/ vītārum/ vītis/ vītis* と単複12形に変化する。この伝統は古英語 (OE) でも同様に、主格・対格・属格・与格の4格 (場合によっては、具格を含めて5格) を認めることができる——例えば、*stān* “stone” は *stān/ stān/ stānes/ stāne; stānas/ stānas/ stāna/ stānum* の単複8形をもつ。これが中英語 (ME) では、主格と対格の形態上の融合が進み、複数形ではほとんど形態上の区別が消失した——上掲の事例 OE の *stān* は *stōn/ stōn/ stōnes/ stōn(e); stōnes / stōnes/ stōnes/ stōnes* となる。この延長線上にある近代英語 (Mod.E) では、人称代名詞を除いた他の名詞群では2格変化しか看取できなくなったため、イエスペルセン (Otto Jespersen: 1860–1943) はこれを通格 (common case) と属格 (genitive case) とに分類した。これは、形式と意味に一对一の対応関係が認められて初めて文法範疇として認定する形態重視の立場を貫くイエスペルセンの文法観からすると当然の帰結であろうし、同時代のスウィート (Henry Sweet: 1845–1912) やクロイシンハー (Etsko Kruisinga: 1875–1944) も同様の言語観を示す。また、現在最も信頼性が高いとされる文法書 *CGEL* を編んだクワーク (Randolph Quirk: 1920– ) もこの立場に近いといえる。他方、機能や意味重視の視点に立脚するカーム (George O. Curme: 1860–1948) は、現代英語の名詞群にも OE 同様の4格 (主・対・属・与) を認め、ソネンシャイン (Edward Sonnenschein: 1851–1929) は呼格を加えた5格を主張する。カームの格の定義に拠れば<sup>1)</sup>、前置詞の目的語だけにとどまらず、前置詞句全体も格を保有することになり、これは屈折前置詞 (inflectional preposition) と呼ばれる。もっとも、この解釈をめぐる、イエスペルセンとカームの間に英文法論争のあったことは

人口に膾炙しているうえに、カームによる格の定義や分類の厳密さの欠如について指摘のあることも事実ではあるが[荒木(1966: 146-49, 184-92)]、まだ機能主義や認知主義といった立場が言語研究において確立しない時期に、カームが表明したこの言語観は過小評価されるべきものではなく、むしろそうした言語観の魁として積極的に再評価されるべきものではないかというのが本稿執筆者の見解である。

ところで、次のような英文に遭遇した場合に何と訳せば、英文の意味を十分に伝えることができるであろうか。“... that if near-natives have the same knowledge as that exhibited by natives, the existence of UG constraints on L2 acquisition is confirmed; ...” [Sorace (2003: 131)]。「もし近似ネイティブが真ネイティブが示すのと同じ知識をもっているとすれば、第二言語習得上に普遍文法制約の存在が確かめられるのである」という程度の邦訳で合格点とすべきなのかもしれないが、熟達者であれば、「第二言語習得を制約する普遍文法の存在が確かめられる…」という達意の日本語に訳すのではないだろうか。確かに、前置詞 *on* は(表面接触を物理的あるいは比喩的に含意する) 処格を表わすには違いないが、この場合、当該の前置詞句 *on L2 acquisition* 全体が、*constraints* という形に名詞化している他動詞 *constrain* の効力が及ぶ対象を表わしていると考えるのが自然ではないだろうか。また同様に、“... this apparent ‘cultural difference’ lies not in ..., but in differences in the structuring of situations and participant roles” [Scollon (2012: 100)] は「この明らかな“文化的相違”は…にあるのではなく、状況と(会話の) 参与者の役割の構造の違いにあるのだ」ではなく、「……、状況と(会話の) 参与者の役割を構築する際の違いにあるのだ」と邦訳するのが適当であろう。この場合の前置詞 *of* は明らかに目的語属格 (*objective genitive*) であり、前置詞 *in* は空間を表わすというよりは、時間を表現している。すなわち、どちらの場合も、動詞効力の及ぶ前置詞句は点的あるいは静的なものではなく、線的あるいは動的なものとして、話者・聴者の *mental image* を形成するのである。

そこで、本稿では前置詞を単なる「容器」を比喩的に導く標識 (*marker*) ではなく、当該前置詞を伴った句全体が句構造における動詞の目的語の機能を果たしているという解釈を許すことにより、格屈折語尾を消失して同一文における単語間の意味関係が分かりにくくなった現代英語文に対する理解を促すことを目的とする。同時に、それは学校英文法(学習英文法)

の盲点を捕捉し、学習者の英文構造の理解を支援することにも直截に関わる考察であるといえる。

### 前置詞句の機能と利害の与格

英語における前置詞の存在は OE から認められる——例えば、*æfter / be / for, fore / fram / in / mid / of / on / þurh / to / wiþ ... weard / ymb, ymbe* 等。このうち、北方ゲルマン語 (Old Norse) との言語接触により、OE に *fram* “from” が取り入れられたことや、*with* (ON では *við* に相当し、OE では *mid* に相当) という前置詞が意味拡張する誘因となったことは興味深い事実ではあるが<sup>2)</sup>、後者 *with* の場合、おそらくは内容語 (content word) から機能語 (function word) へと、副詞としての語彙固有の意味が漂白化 (bleaching) し、文法化 (grammaticalisation) したものと考えられる。そうでなければ、*fight against* と *fight with* が同義で使用される説明がつかない。さらに、この趣の文法化の目的は、次のような動詞構文の場合を考えるといつそう明瞭になる。

- (1 a.) The mother is making a new coat for her boy John.
- (1 b.) She will give it to him when he comes home from school.
- (1 c.) I set a trap for the mouse.
- (1 d.) He played a mean trick on his father.

上掲の例文はいずれも Curme (1935: §.27b) からのものだが、動詞効力が前置詞付きの対象に利害が及ぶことを示す前置詞的与格 (Prepositional Dative) の事例である。

現在でも、学校文法 (学習文法) においては、次のような動詞の第4文型 (SVOO) から第3文型 (SVO[A]) への等価の書き換えが強調されるが、それについては情報構造の視点から注意が必要である。この場合、第3文型の [A] は、*give* 動詞型では *to+N* に、*buy* 動詞型では *for+N* になるが、当該構文において直接目的語 (いわゆる対格) で表わされる事物の移動を伴う場合には *to+N* の前置詞句が選択される傾向にある。また、動詞の効力が直接目的語に及び、その利益を受ける対象 (いわゆる利害の与格) が *for+N* の前置詞句で表現される傾向にある。

[give型] give, lend, pass, pay, sell, serve, lease (授与動詞); send, mail, ship, forward, post (送付動詞); throw, pitch, hurl, kick, toss (投与動詞); tell, read, write, telephone (伝達動詞); bring, take, carry, drag (運搬動詞); promise, assign, leave (将来の所有動詞); &c.

[buy型] make, build, cook, knit, bake, fix, pour, sew, arrange (創造動詞); buy, get, find, steal, order, catch, earn, grab, fetch, gain, pick (獲得動詞); &c.

[足立・都築 (2010: 88-89)]

こうした前置詞句の選択理由は、機能語である前置詞といえども、基本となる内容語的情報を包摂していると解釈すれば、動詞との関係から十分に納得がいく。しかし、次のような英文ではどうであろうか。

(2 a.) This law will deprive us of our basic rights. (LDOCE<sup>2</sup>)

(2 b.) The gangsters robbed the boy of his money.

この例文 (2 a./ 2 b.) において、動詞 *deprive* や *rob* の直接目的語がどうして *of*-phrase で表現されるのであろうか。それについて考察するとき、*of* という前置詞の意味の源を「分離」(from) に求めれば、齋藤秀三郎著『熟語本位 英和中辞典』に曰く、奪却・剝奪の動詞の場合に「重荷をおろして楽にするに因む」という説明も可能になる。事実、江川 (1991: §.276) では“*He robbed me of my watch*”という例文について、「*me* から *watch* を奪うのであるが、構文上は *my watch* から *me* を奪うような感じを与える」と解説し、「いわゆる転置によって2つの目的語の位置が入れ換わったのであろう」と推測する。同様の構文をとる動詞には *rob*, *deprive*, *clear*, *cheat*, *cure*, *ease* 等がある。

つまり、例文 (2 a./ 2 b.) に共通に看取されるように、動詞 *deprive* や *rob* に後続する間接目的語の *us* や *the boy* は「利害の与格」(Dative of Interest) を表す次の構文とのハイブリッド型であると解釈することができる<sup>3)</sup>。これらの構文 (3 a./ 3 b.) では、前置詞句は部位を表わす処格である。

(3 a.) She patted me gently on the back. (KDOEC)

(3 b.) The coach struck him on the head.

(3 c.) The coach struck his head.

上掲例文(3 b.)は、この行為によって「彼」という一個人が影響を受けた——例えば、心理的な形で人格に影響があったということを暗示的に意味しており、実際になぐるという行為が向けられた箇所は、文字通りに場所として〈前置詞句〉の形で表現されている[池上(1991: 71-72)]。一方、例文(3 c.)は、なぐるという行為がどこに向けられたかとの関連だけを伝達する含意をもつと解釈される。また、(3 a./ 3 b.)型の構文は、不可分の所有(inalienable possession)という条件を満たしていなければならない。それに従えば、“\*The coach struck him on the bag”は文法的非文となり、“The coach struck his bag”が文法的正文となる<sup>4)</sup>。

ここまでのところで、この類型の構文は、動詞に直近に後続する与格目的語までで文全体の意味——すなわち、動詞の効力の及ぶ範囲の概要について言及し、その後具体的な事柄を附加するという特徴をもつことが分かった。しかし、例文(2 a./ 2 b.)について問題提起した、動詞 *deprive* や *rob* の直接目的語がどうして *of*-phrase ——すなわち、属格で表現されるのかについては、次節の歴史的考察を抜きにして明らかにすることはできない<sup>5)</sup>。

### 動詞の格支配——属格支配から対格支配と不変化詞への駆流

Brunner (邦訳『英語発達史』1973: 415)によれば、古英語において属格は、分配的あるいは説明的意味を伴って一定の形容詞とともに用いられることに加えて、情緒・思考・意欲・享受・参加・受納を表わす動詞とともに用いられると指摘される。Mitchell (1985: 561-62)に依拠して詳述すれば、古英語で属格を支配(rection)する動詞群は2つに分類される——すなわち、①属格のみを目的語としてとる *frician* “desire”のような動詞と、②-1属格と他の斜格(対格や与格)を選択的に目的語としてとる *onfon* “receive”や、②-2属格と他の斜格を複合的に目的語としてとる *lettan* “hinder someone (acc.) from something (gen.)”や *þancian* “thank someone (dat.) for something (gen.)”といった動詞である。

ここで、Visser (1963)の分類よりも実態に即した動詞の格支配一覧で

あるとみずから言及する Mitchell (1985: 455-64) に依拠して、属格のみを支配する①動詞類と、属格と他の斜格を複合する②-2動詞類の主なものを列挙して参考に附す。これらの動詞に支配される属格は、日本語的感覚では概ね「を」格に対応する。

anþracian “lament”; bædan “require, demand”; basnian “wait for”; bensian “pray to (acc.) for (gen.)”; on-bidan “wait for”; a-bitan “taste, partake of”; blinnan “cease from”; blissian “rejoice at”; boeta “acquire”; bon “boast of”; on-cunnan “accuse (acc.) of (gen.)”; ondrincan “drink of”; efestan “strive after, undertake”; fæstan “abstain from”; felan “feel, perceive, touch”; efen-ge-feon “rejoice together at”; ; friclan “desire”; frignan “ask (acc.) of (gen.)”; giernan “ask for”; gilpan “boast of, glory in”; hentan “pursue, follow”; hligan “give (acc.) a reputation for (gen.)”; hlosnian “listen to, wait for”; a-idlian “deprive of”; to-lætan “release (gen.) to (dat.)”; latian “delay from”; lettan “hinder (acc.) from (gen.)”; of-linnan “desist from”; locian “take care of”; lystan “desire”; manian “claim (gen.) of (acc.)”; missan “miss, fail to hit”; on-munan “consider (acc.) worthy of (gen.)”; myndgian “remind (acc.) of (gen.)”; be-nugan “need, enjoy”; nyttian “make use of, enjoy”; ge-ortreowan “despair of”; pleon “risk”: be-rædan “deprive (acc.) of (gen.)”; reafian “rob (acc.) of (gen.)”; ge-restan “rest from”; romian “strive after”; æt-sacan “deny”: sætan “lie in wait for”; sceamian “feel ashamed of”; be-scierian “deprive (acc.) of (gen.)”; sciran “get clear of, get rid of”; sinnan “care for, head”; a-sittan “fear”; slæpan “be asleep to”; a-slawian “become sluggish in”; wip-standan “prevent (dat.) in respect of (gen.)”; be-strypan “strip (acc.) of (gen.)”; sweltan “die to”; teon “accuse (acc.) of (gen.)”; of-teon “deprive(dat./acc.) of (gen.)”; truwian “clear (dat./acc.) of (gen.)”; ge-twæfan “deprive (acc.) of (gen.)”; þancian “thank (acc.) for (gen.)”; þicgan “partake of”; þolian “lose”; be-þurfan “need”; aþwean “cleanse (acc.) of (gen.)”; sinþyrstan “thirst always for”; unnan “wish (dat.)(gen.)”; wædian

“lack”; wafian “wonder at”; weddian “engage to do”; ge-weorþan “agree about”; be-werian “restrain (acc.) from (gen.)”; fore-wregan “accuse (acc.) of (gen.)”; æt-wrencan “cheat (acc.) of (gen.)”; for-wyrnan “restrain (dat.) from (gen.)”; &c.

これに②-1動詞類を加えると、属格支配の動詞が想像以上に多いことが分かる。また、ある種の形容詞も属格支配をなす。実際、ドイツ語や古英語には次のような文を認めることができる（いずれも KDOEP: 418からの引用）。

- (4 a.) Ich bedarf Ihres Beistandes. “I am in need of your help.”  
 (4 b.) Er war seines Sieges sicher. “He was sure of his victory.”  
 (4 c.) Hie pæs fægnodon. “They were glad of it.”  
 (4 d.) Dū eart wierþe sleges. “Thou art worthy of death.”

これに関連して、近藤(1984: 39-49)は「もっぱら属格だけを支配した動詞が対格をも支配するようになったとき、属格の機能が対格のそれに包みこまれてしまった」と推論し、動詞の格支配が属格支配から対格支配へと転化する過程を次のような事例 [5a → 5 a', 5b → 5 b'] で指摘する。

- (5 a.) he ... gyrnde heora fultumes<sub>(gen.)</sub>  
 “he yearned for their assistance”  
 (Peterborough Chron. A.D.1088)  
 (5 a'.) he ... iærnde ... þone abbotrice<sub>(acc.)</sub> of Burhc  
 “he yearned for the abbacy of Peterborough”  
 (ibid. A.D.1127)  
 (5 b.) forhwan hine se cyng ealles<sub>(gen.)</sub> benæmde  
 “for which the king deprived him of all”  
 (ibid. A.D.1104)  
 (5 b'.) man ... benam ælc ðone riht hand & þa stanes beneðan<sub>(acc.)</sub>  
 “man deprived each of the right hand and testicles below”  
 (ibid. A.D.1125)



それでは、動詞の格支配について、属格支配から対格支配に転化させた要因とはいったい何であろうか<sup>6)</sup>。第一には、名詞の格屈折語尾の水平化と SVO 型語順の定着化にあると考えられる。元来、OE の格体系において、主格と対格は同じ形をしている。OE 後期から ME にかけての語順の固定化により、動詞に後続する語が目的語であるとの言語使用者の意識が明確化すれば、語順の入れ替えによる意味の同定を保証する必要がなくなるために、「係り結び」を明示的に表わす有標形 (marked form) の属格を選択する必要がなくなるといふことである。

第二には、属格に課せられた多元的機能あるいは機能過多からの機能分散ということがあげられる。属格は古い時代には使用範囲が広く、“in a sphere” が中心的概念であったとされるが、OE や ME では上述のように、属格は一定の種類動詞や形容詞の支配を受けた——つまり、属格目的語 (Genitive Object) としての機能をもったが、Mod.E 以後は属格目的語の機能は消失し、その機能は前置詞句に継承された。現代英語で、I am thinking of my duty; They robbed him of his money; They complained of their hard lot; I reminded him of his promise; He accused me of untruths; The glass is full of water の下線部がその中心的概念を体現する属格目的語としての機能をもつ [Curme (1931: §.13.3)]。

第三としては、サピア (Edward Sapir: 1884-1939) の提唱する駆流 (drift) 説を援用すれば、英語には他のヨーロッパ諸語と同様に (S)OV 型言語から (SVO) 型言語に移行する力学が働き、それは同時に、誰が何をするのかを明示する主格 - 対格言語に移行する——すなわち、池上 (1981) の術語を借りるなら、「なる的言語」から「する的言語」へ移行する潮流を惹起せしめたことである。而して、それは非人称構文 (Impersonal Construction) から人称構文中心の言語表現を好むという言語使用者の心理の変化を誘発し、自動性から他動性への意識強化へと進む。さらに、不変化詞に向かおうとする駆流は、主格と同形の対格を採用し、前置詞を寵用することにつながる [Sapir (1921: 168)]。

### 係り結び詞——前置詞の意味役割附与の有無

伝統文法では前置詞は機能語であるといつかりにすることがしばしば行なわれる。名は体を表わすといふが、内容語はもとより、他の機能語であつ

ても、その名称から、それがどのような概念や機能をもつ実体であるかがある程度は想像することができる。しかし、前置詞は“preposition”という単なる物理的名称を与えられているに過ぎず、極めて曖昧で軽微な統語上の存在として認識されてきたことを示唆している。

ところが、生成文法的分析を採る説明文法では、前置詞が意味を明示的に持つか持たないかで二種類に分類して、その性質を明らかにする。次の例文を比較してみるとよい。どちらも学校文法ではSVと分類される構文である。

(6 a.) My brother sat near the president.

(6 b.) My brother counted on the president.

上掲の例文(6 a.)では、前置詞 near の目的語 the president は当該前置詞の項(argument)となって、当該前置詞から意味役割(thematic role)を与えられる。一方、例文(6 b.)では、前置詞 on の目的語 the president は動詞 counted の項となって、当該動詞から直接に意味役割を与えられる。つまり、後者の場合に、前置詞には意味役割を付与する資格がない。このことは、前置詞に後続する the president が受動文の主語になれるかどうかで検証することができる。すなわち、動詞の項でなければ、受動文の主語にはなれない。

(7 a.) \*The president was sat near [by my brother].

(7 b.) The president was counted on [by my brother].

要約すれば、前置詞の中で意味役割を与えることのできる類は、前置詞句全体が副詞相当語句(adverbials)となってSVA構文を形成するが、一方、意味役割を与えることのできない類は、前置詞に後続する名詞句に格付与を行なうための標識——換言すれば、「係り結び詞」としてのみ機能しているといつてよい。この点については、本稿「前置詞句の機能と利害の与格」節で言及したカームの屈折前置詞の説明において、“you can depend upon him”のように、動詞に後続して自動詞を他動詞化する不変化詞としての機能がすでに指摘されていることは看過できない事実である。

実際のところ、ESL 系列の学習文法書には “Verbs with Prepositions” として、次のような事例とともに、係り結び機能が提示される。

V+about [subject matter](care, complain, dream, explain, hear, know, speak, talk, think, write)

V+at [direction](glance, glare, grin, laugh, look, shout, smile, stare)

V+for [purpose/reason](apologize, apply, ask, look, wait)

V+into [object involved in a collision](bump, crash, drive, run)

V+of [facts/information](hear, know, speak, talk, think)

V+on [confidence/certainty](count, depend, plan, rely)

V+to [listener/reader](complain, explain, listen, say, speak, talk, write)

V+with [someone in the same/different opinion](agree, argue, disagree, side)

(*COBUILD Student's Grammar*: 156)

しかし、通時的に考えてみれば、OE においては他のゲルマン諸語同様に、自動詞に接尾辞 -ja を附加して、結果的には幹母音変異を招いて、他動詞を語形成する特徴があったことは強調しておかねばならない——例えば、sittan > settan; sincan > sencan; bugan > bygan; liezean > leezan; feallan > fellan (いずれも intransitive verb から transitive verb への変化)。また、Mod.E を代表する Elizabethan English にも自動詞を他動詞的に使用する例をシェイクスピアの英語に看取することはできるが、現代英語 (PE) において、それほどまでに文脈に依存して、自動詞と他動詞を区別することは不可能であろう。そこで、他動性を示すためには、自動詞に後続する何らかの標識を必要とし、それが意味を持たない空前置詞の使用であったと考えられる。

## 結 語

概念的範疇 (notional category) としての格と文法的範疇 (grammatical category) としての格の齟齬、OE において動詞や形容詞に支配される二

重格の存在——動詞の目的語の場における属格と与格、与格と対格の競合関係、形容詞の目的語の場における属格と与格と対格の競合関係 [近藤 (1984: 33)], 格支配から前置詞支配への構造転換等を考慮に入れると、前置詞の英文法は記述することがそれほど容易ではないことが分かる。

もっとも、学校文法 (学習文法) では人称代名詞にも名詞にも「目的格」を認めるということが行なわれるが<sup>7)</sup>、これは「主格」と同様に、機能的範疇 (functional category) を表わすもの——すなわち、文中の語 (句) の意味役割を示したものであり、名詞の形態変化のみを意識した「通格」と「属格」の区分とは基準が異なるということを改めて強調しておかねばならない。加えて、名詞3格分類の残りの「所有格」はもっぱら名詞との関連性を示す別の位相を表わしていると考えられる。従って、ここでいう「目的格」には OE/ME 文法でいうところの属格・与格・対格すべてが包含されるにもかかわらず、一般の英語学習者にとっては、間接目的語としての与格目的語と直接目的語としての対格目的語は第4文型 (SVOO) との関係から強く意識に上る一方で、いわゆる5文型の鑄型にはまらない属格目的語が意識から欠落するという憾みがある。

現代英語の熟達を標榜する者に必要なことは、表層上同一形式に見える前置詞及び前置詞句に2種類の特性があることを十分に認識し、その1種類は前置詞の効力からでは解決することのできない意味役割、すなわち、動詞効力の及ぶ対象としての機能を当該動詞から附与されている事実に基づくことである。就中、*of*-phrase による前置詞句が OE 時代の属格目的語を表わしており、それは情緒・思考・意欲・享受・参加・受納の意味を表わす動詞と共に起するという通時的かつ機能主義的視点を意識することによって、現代英語構文に対する理解度が著しく異なってくることは、留意すべき重要な指摘に他ならない。

※附言——本稿は、大森 (2011) において記述した内容を再考し、丹羽義信博士 (名古屋大学名誉教授) からの私信で指摘されたいくつかの問題点について加筆修正を施したものである。従って、本稿では引用例及び記述において、大森 (2011) と重複するところが少なくないが、紀要論文という形で発表することにより、大方のご叱正を仰ぐ次第である。また、拙稿 (前稿) を丁寧読んで、有意義な評言をくださった丹羽先生に対し、衷心より謝意を表す。

註

- 1) Case is that form of a noun or pronoun which makes it as the subject of a verb, or as the object of a verb, adjective, or preposition, or as playing the part of an adjective or adverb. [Curme (1935: §. 27)]

They [some prepositions] have often lost a good deal of their original concrete meaning and are no longer felt as prepositions, for they have developed into inflectional particles which indicate definite grammatical relations, often taking the place of older inflectional endings. [ibid.: §. 17]

- 2) 前置詞 *with* の意味拡張については、大森(1997)及び大森(2007)に詳しい。また、『英文学研究』第75巻第2号(1998)には日本英文学会第70回大会(京都大学)での研究発表梗概が掲載されているので参照されたい。
- 3) Dative of Interest 「利害の与格」(e.g. I bought **me** a hat) は、厳密には、受動態文で主語になることができないという特徴をもつ。言語コーパスに基礎をおく *COBUILD English Dictionary* や *OALD* では、動詞 *deprive* も *rob* も(人主語の)受動態文での用例が掲載されているところから判断すると、当該文の間接目的語は文法的には利害の与格に分類できない可能性もあるが、心理的には利害の与格であろう。その意味では、Ethical Dative 「心性的与格」と考えてもよい。
- 4) 認知言語学的にいえば、この場合の間接目的語と後続する前置詞句との間には、空間のメトニミー (metonymy/換喩) による「隣接関係」、とりわけ、「構成部分と全体の関係」が成立していなければならないということになる。  
e.g. “He patted **me** awkwardly on the shoulder, trying to show sympathy for my desire to chase after wild geese. [巻下・瀬戸 (1997): 129]
- 5) ここでのポイントは次のようになる——OE の与格 (dative) の屈折活用が水平化した結果、それを補完すべく語順の固定化が顕在化したものの、第4文型 *SVOO* の与格は、意味を正確に伝えるには不十分であった。そのため、それをさらに強化すべく、前置詞的与格が登場することになった。前置詞は本来、内容語 (content word) であり、具体的な意味をもつ。従って、異なる前置詞を使用することにより、語順による方法よりも、強く明確に、与格の意味を表わすことができるようになった。丹羽義信博士(名古屋大学名誉教授)からの私信中の指摘に依拠すれば、それは氏の主張する Cumulative Tendency の一例として考えられる [丹羽 (2010: 96)]。
- 6) もっとも、丹羽義信博士の見解には、この場合の属格から対格への移行は例外的、あるいは、前置詞への移行期中間段階ではないかとの指摘がある。その理由は、属格の意味を十分に表わすことのできる前置詞があるにもかかわらず、対格へ移行するのは変化の方向が反対であるからである。前置詞の

中でも、分離を示す *of* や *from* がその後継者であると思われるが、OE における属格支配の動詞は、Mitchell (1985) の例に看取できるように、ほとんど置き換え検証が困難である。ただし、次のような例を OED に確認することができることは興味深い。

OED Let  $v^2$  *arch.* 1. *trans.* C const. *from*, † *of* (OE. genitive).

- ① *a* 1000 *Prose Life Guthlac* v. (1848) 30 We þe þæs nu nellað *lettan* þæs þu ær ʒeþoht hæfdest.
- ② *a* 1225 *Ancr. R.* 352 Monie þinges muwen *letten* him of his jurneie.
- ③ 1866 J. H. Newman *Gerontius* iii, 22 *Soul.* What *lets* me now from going to my Lord?

上掲の①は OE の例で、動詞 *let* は属格を取っているが、②は ME の例で、前置詞 *of* を取っている。さらに、③の Mod.E の例では、前置詞 *from* を取ったことが分かる。この例が示唆するところは、丹羽博士の主張する Cumulative Tendency の存在を裏づけている。すなわち、属格の活用形が消失したため、その意味を強めるために、属格の意味に近い前置詞 *of* が採用されたが、やがて、その前置詞 *of* も意味が弱くなると、次段階ではより強い意味をもつ前置詞 *from* が採用されるようになったという説明が可能となるのは、CT の存在を認めることによる。

7) 名詞に主格／所有格／目的格の3格を認めるという学校文法の伝統は、Lindley Murray (1795) [いわゆる『モルレイ氏・英吉利小文典』Pt. II, Chap. III, Sec. 4] に由来すると思われる。これは、ラテン文法的な形式主義と現実的英文法の機能主義を併合した折衷案である。

## 参考文献

- 足立公也・都築雅子(編)(2010)『学校文法の語らなかつた英語構文』[中京大学文化科学叢書第11輯] 勁草書房。  
荒木一雄(1966)『英文法——理論と実践』研究社。  
Curme, G. O. (1931) *Syntax* [A Grammar of the English Language, Vol. 2], D. C. Heath & Co.  
Curme, G. O. (1935) *Parts of Speech & Accidence* [A Grammar of the English Language, Vol. 1], D. C. Heath & Co.  
江川泰一郎(1991)『英文法詳説(改訂3版)』金子書房。  
池上嘉彦(1981)『「する」と「なる」の言語学』大修館書店。  
池上嘉彦(1991)『〈英文法〉を考える』筑摩書房。  
Jespersen, O. (1924) *The Philosophy of Grammar*, George Allen & Unwin.  
河合 茂(1944)『英文法概論』京極書店。[復刻版:明倫出版, 1988.]

- 近藤健二 (1984) 『英語前置詞構文の起源』松柏社。
- 松浪 有・小野 茂・忍足欣四郎・秦 宏一 (共訳) (1973) 『英語発達史』大修館書店。[原著 Karl Brunner, *Die englische Sprache I und II*, 1960-62.]
- 卷下吉夫・瀬戸賢一 (1997) 『文化と発想とレトリック』研究社。
- Mitchell, B. (1985) *Old English Syntax*, Vol. 1, Clarendon Press.
- Murray, L. (1795) *English Grammar, Adapted to the Different Classes of Learners*, rpt., 1971, 南雲堂。
- 丹羽義信 (1963) 『古代英語動詞接頭辞 GE- の研究』松柏社。
- Niwa, Yoshinobu (丹羽義信) (2010) “An Attempt at Classifying Prefixes and Particles Added to OE Verbs,” *English Linguistics* 27:1, 80-103.
- 大森裕實 (1995) 「英語属格形式の生産性に関する一考察」『言語研究と英語教育』(中部応用言語学研究会) 3, 15-35.
- 大森裕實 (1997) 「OE・ME における前置詞 *wiþ*/*mid*/*against* の分布に関する語彙意味論的分析」『愛知県立大学外国語学部紀要〈言語・文学編〉』29, 1-24.
- 大森裕實 (2007) 「英語前置詞 *with* と *mid* の競合的意味関係の変化に関する整合的解釈」『愛知県立大学外国語学部紀要〈言語・文学編〉』39, 1-22.
- 大森裕實 (2011) 「英語前置詞の機能格文法試論」『ことばとコミュニケーションのフォーラム』(安武知子 [代表編]) 開拓社。
- Quirk, R. et al. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman.
- Sapir, E. (1921) *Language: An Introduction to the Study of Speech*, Harcourt Brace & Co.
- Scollon, R. et al. (2012<sup>3</sup>) *Intercultural Communication*. Wiley-Blackwell.
- Sorace, A. (2003) “Near-Nativeness,” *The Handbook of Second Language Acquisition*, ed. by Catherine Doughty and Michael Long, 130-151, Blackwell Publishing.
- Visser, Th. F. (1963) *An Historical Syntax of the English Language*, Vol. 1, E. J. Brill.

[引用辞書及び参考書 Acronyms]

- COBUILD *Student's Grammar* (Ed. Jenny Watson, Harper Collins, 1991)
- KDOEC (*The Kenkyusha Dictionary of English Collocations*) 『新編 英和活用大辞典』(市川繁治郎 [編], 研究社, 1995)
- KDOEP (*The Kenkyusha Dictionary of English Philology*) 『英語学辞典』(市河三喜 [編], 研究社, 1940)
- LDOCE<sup>2</sup> (*Longman Dictionary of Contemporary English, 2nd ed.*) (Longman, 1980)